

# 明日へ翔べ

## 登場人物

結衣 . . . . . 花火師の女

天使 . . . . . ニコニコスマイルの男

彩香 . . . . . 親友を待つ女

麻里 . . . . . オロオロする女

【第1場】

麻里 2025年、7月26日、土曜日。

彩香 浅草駅、本所吾妻橋駅、押上駅、東京スカイツリー駅。浅草周辺のすべての駅は、人で埋まった。

麻里 浴衣を着たカップル。子供連れの家族。

彩香 笑顔に満ちた人の、顔、顔、顔。

麻里 警察官に誘導されて、ゆっくりと動く、人込みの大群。

彩香 私と妹の麻里は、隅田川で打ち上げられる、第47回、隅田川花火大会を見に、浅草へ向かった。

麻里 来場予想は、およそ100万人。周辺住民、外国人観光客、そして日本全国から多くの方が、一年に一度の祭典を楽しみに、ここ隅田川周辺に集まってきている。

彩香 私たちの目的は、花火を見ることではなく、花火大会の映像を撮ること。

麻里 そして、一刻も早く、生死をさまよう結衣ちゃんのもとに、その映像を届け、音声を聞かせてあげること。私たちに残された1%の可能性を信じて。

彩香 午後6時、交通規制の時刻になる。規制を待っていた人込みの大群が、ゆっくりと動き出した。逸る気持ちを抑えながら、ゆっくりと前に進む。規制が始まり、国道6号線、浅草江戸通りが歩行者天国になった、その瞬間。『行くこう。』

麻里 『うん。』

彩香 私と麻里は、走って場所取りをする。

麻里 ビニールシートを広げ、場所を確保する。

彩香　すぐに一眼レフをセッティングする。時計を見る。時刻は午後6時5分。開始の7時まで、およそ1時間。ひとつため息をつく。

麻里　『飲み物買ってくるね。』

彩香　『うん。』

麻里　私は立ち上がり、席を離れた。

彩香　麻里の背中を見届けながら、視線をそのまま、花火が上がるであろう、空の方へ向けてみた：結衣との思い出が蘇ってきた。あの日の事。：2017年夏、中3だった私と結衣は、この隅田川の花火大会を見に来ました。それが私たちのスタートでした。：私たちはこの日、2人で花火師になるという夢を持ちました。日本で数人しかいない女花火師。狭き門、難易度の高い技術の習得。そんな困難を乗り越えて、日本の伝統を後世に伝えたい、そんな思いを抱きました。いつか、隅田川で花火を打ち上げたい、そんな夢を抱きました。卒業後、私たちはすぐに花火会社の門をたたきました。最初は門前払いされたけど、私たちは認められ、徐々に技術を身に付けていき、ついにおととい、結衣は初めての花火を、実験で作らせてもらうことになりました。その実験で事故が起きました。結衣は今、生死の境をさまよっています。：私は結衣のそばに居続けました。状況は一進一退。まだ、わずかに意識はあるものの、少しずつ状態は悪くなっていく。医者曇った表情から、状態はかなり深刻であると受け止めました。：結衣に頑張れ、頑張れと声をかける中、もしかしたら、私たちの原点である、この花火大会の花火の音を聞かせることで、奇跡的に、何かの奇跡が起こって、結衣の命が救われるのではないか。そう思えてきたのです。結衣のような状態でも、音は聞き取れる。そして、音が脳に届き、結衣の魂が生きる方へ向く可能性がある。そんなこと、あるわけない。そう思っているでも、今の状況では、それぐらいしか、方法が見当たりにませんでした。それに賭けるしかありませんでした。だから私は、1%の可能性を信じて、今こうして、カメ

ラを構えているのです。

麻里 浅草駅前のコンビニに到着する。今こそ、お姉ちゃんのためになる、そのことだけを心に刻んで。…お姉ちゃん  
んと結衣ちゃんは、希望の光でした。数少ない女性の花火師という道を歩く2人は、私にとってとてつもなくか  
っこよく、花火で世界に希望を与える、そんなことを口にする二人のようになりたいと、ずっと思って生きてき  
ました。私には何もない。世界に希望を与える、そんな要素は私のどこを探しても一ミリもありません。いつも  
オロオロするだけ。私には、人の役に立つ能力が欠けていました。…結衣ちゃんの一報を受けたときは、頭が真  
っ白になりました。私はまたオロオロするしかなかった。…でも、今、強く思うのです。今こそ、誰かのために  
ならなければ。結衣ちゃんや、悲しみに暮れるお姉ちゃん、結衣ちゃんのお母さん、今誰かのためにならなくて、  
いつなるの？…だから私は、今、お姉ちゃんを支える、そこだけを刻んで、今、ここにいます。

彩香 午後6時30分。空が少しずつ薄暗くなってきた。

麻里 混雑の中、コンビニからようやくお姉ちゃんの元に戻ることができた…『はい。』…お姉ちゃんにお茶を渡す。

彩香 『いいのに。』…麻里からお茶を受け取る。

麻里 お姉ちゃんは、少しだけ笑った。今日初めて、そんな顔を見たと思って、少し嬉しくなった。

彩香 午後6時40分、開始20分前。間もなくスタート。すると…西の方から真っ黒な雨雲がゆっくりと空を覆った。

麻里 数分おきに閃光が走る。

彩香 次第にゴロゴロと、雷がなりはじめて、雨がぼつぼつと降り始める。

麻里 降り出した雨は、やがて大粒の雨に変わる。

彩香 雨脚は、どんどん強くなっていく。

麻里 どしゃぶりの雨が会場をつつむ。

彩香 『ちょっと、何これ。』

麻里 『ちょっとこれ、ヤバいかも。』

彩香 突然のゲリラ豪雨。…浅草江戸通りは大混乱になった。屋外の観覧場所には屋根がない。傘をさす人。慌てて荷物にビニールをかぶせる人。ぎゅうぎゅうに座る観客たちが全員大雨にさらされ、慌てる声、そして雷鳴と悲鳴が重なりあい、騒然とした空気。

麻里 雨はさらに強くなっていく。アスファルトのくぼみに、水たまりも。

彩香 風も出てきた。雨は横殴りに変わる。傘が意味をなさなくなってくる。

麻里 強風で、傘がひっくり返る光景もあちこちで見られる。慌てる人の大群。混乱と悲鳴。今まで見たことがない異様な光景。

彩香 雨が降り始めてから10分ぐらいすると、運営本部からアナウンスが聞こえてきた。…『本日の花火大会は、中止とさせていただきます。』

麻里 驚きの声と、不満の声。

彩香 こんなことが起こるなんて。私たちは、花火の写真を撮ることができなくなってしまった。

## 【第2場】

彩香 花火大会は、雨で中止になることはそんなにない。花火の筒には蓋があり、花火への点火は、機械による電子着火で行われるため、雨に影響されることはない。中止になるのは、強風と雷の影響で、保全区域と呼ばれる、人や船が侵入している地域に、花火の残骸が落ち、安全に影響が出ると判断されたときだけ。去年の足立区の花火

大会がそうだったように。それが起こってしまったとは。私たちは、1%の望みを天に絶たれた。

お姉ちゃんの心の内が、手に取るように分かった。お姉ちゃんを支えなきゃ。言葉をかけなきゃ。でも、浮かんでこない。すると、お姉ちゃんの方から声をかけてきた。

『ねえ？』

『何？』

『どうしてこんなにひどいんだろうね。』

『何が？』

『運命ってさ。』

『…。』

彩香 『何でこんなことになるの？』 私は傘を地面にたたきつけて、空に向かって、叫んだ。…『どうして！？どうして！？』…悔しかった。ただただ、悔しかった。神なんて、この世にいない。ひどすぎる。結衣が何をしたら…というの？世界には、もっと悪い人、いるでしょ？どうして、結衣のような優しい人の命を奪おうするの？…悔しくて、悔しくて、私はその場で泣き崩れてしまった。

麻里 泣き崩れたお姉ちゃんを見て、何かできることをと思った。でも、何もできなかった。

彩香 その時、結衣のお母さんからメールが来た。

麻里 『何って？』

彩香 『昏睡状態。早く戻ってきて。』

麻里 『昏睡状態？』 視界が真っ暗になった。

彩香 騒然とした雰囲気の中、雨に打たれながら、私たちは、ただ、立ち尽くすしかなかった。

【第3場】

結衣 空を漂いながら、私はその様子を見ていました。そうだ。今日は隅田川の花火大会。私と彩香にとっての目標。そっか、私、こうなってしまったのか。…事故のことは覚えてる。焦って手元が狂った私は、花火実験の打ち上げに失敗してしまった。それで、病院に運ばれて。それで、二人とも私の事を思って。雨が邪魔をして。…と、いろいろ考えていると、たくさんの疑問が浮かんだ。…ちょっと待って?…何これ?今、どういう状態?…え?私、宙に浮いてる?なんで?なんで浮いてんの?…私には世界が見える。そりゃそうだよ。普通に見える。でも、私に見えている人達には、私が見えていない様子。…なんで?なんで見えないの?…あと、私の服。なんで、白のワンピース?こんな服持ってないし。どっちかと言えば、私が着ないタイプの服だし。…そんなことを考えていたら…突然、私のさらに上空から、同じ白のワンピースに白いマント、さらに大きな白い羽根を2つ背負った、ニコニコスマイルの男が現れた。

天使 『ハッピー、DEATH!』

結衣 『うわ!』私は、驚いて、後ずさりをする。後ずさりしたつもりが、10メートルぐらいビヨーンって下がった。なにこれ?どうなってんの?

天使 『ハッピー、DEATH!…わかります?ユー、アー、デッド。…あ、誤解しないでくださいね。これ、祝福してるんです。こちらの世界へようこそ、っていう意味で。アハハハハ!』

結衣 『あの一!』

天使 『はい。』

結衣 『どなたですか？』

天使 『私は…エンジェルです。』

結衣 『エンジェル？』

天使 『はい。あなたを、あっちの世界にお連れするためにやって参りました。いわば私は、下と上をつなぐ、死の案

内人。』

結衣 『死の案内人？』ニコニコスマイルは、どこからか出したのか、大量の書類をすごいスピードでめくり始めた。

天使 『ええ、邑野結衣さん。享年23歳。お仕事中、不慮の爆発事故に巻き込まれ、お亡くなりになりました。』

結衣 『え？』

天使 『この度はご愁傷さまです。』

結衣 『ご愁傷さまです？』

天使 『死んだんですよ。覚えてませんか？…あなたは、花火のお仕事の途中、打ち上げに失敗してしまいました。覚えてませんか？』

結衣 『覚えてます。』

天使 『ですよ？それで、その打ち上がらなかった花火の火が、別の花火に引火し、爆発に巻き込まれてしまいました。覚えてませんか？』

結衣 『覚えてます。』

天使 『だから死んだんです。』

結衣 『え？』

天使 『それは覚えてない？そっかあ、これ、覚えてるパターンと覚えてないパターンがあるんだよなあ。』

結衣 ハンマーで頭を殴られたような衝撃。私、死んだの？

天使 『でも、ご安心ください。上の世界は、あなたたち人間が思うほど、悪い世界ではありません。あなたはこれから、幸せの道へと歩き始める……私が穏やかな世界にお連れ致しますので、安心してください。』

結衣 『ちよつと待ってください。私、確かに事故に遭いました。でも、見ての通り、まだ生死の境をさまよっています。それに、私、まだやり残したことがあるんです。私のことで、苦しんでいる人たちもいる。…死にたくないです。』

天使 『まあ、こっちにやってくるのは、ちよつと時間差になることがあるんですよ。それはもう、上の決まりなんです、仕方ありません。あと、死にたくないとか、やり残したことがあるとか、これまで多くの方が同じことをおっしゃいました。でも、これは神が決めたこと。仕方ありません。』

結衣 『ええ？』

天使 『あなたはこれから、神のお裁きを受け、あなたが上の世界でどのポジションに収まるのか、決定する作業に入ります。どのポジション、それは、穏やかなポジション、やや穏やかなポジションの2つ。あなたの、下での行いが、判断材料となります。フッフッフ。』

結衣 私は頭が真っ白だ。言ってることが、全然入って来ない。

天使 『神のお裁きまで、少しお時間がございます。それまで、下の世界でも見ながら、心の準備をしてください。お裁きが出たら、お迎えに参ります。また、お会いしましょう。』

結衣 ニコニコスマイルはそう言うのと、空に浮きあがり、羽根をはばたかせて飛んで行った。『あの！』私は大きな声で叫んだ。遠くまで飛んで行ったニコニコスマイルが、旋回して戻ってくる。

天使 『何か？』

結衣 『私、本当に死んだんでしょうか。』

天使 『そうですよ。』

結衣 『本当に？』

天使 『はい。』

結衣 『だとしたら…今、私が生きて戻ってくることを信じている人達。例えば、あの、親友の彩香と、妹の麻里は、  
どうなるんでしょうか。』

天使 『お気の毒ですね。』

結衣 『この後、どうなるんでしょうか。』

天使 『ショックでしょうね。』

結衣 『え？』

天使 『生きている人間は、他人の死を受け入れる。それが宿命。頑張ってもらいませよ。』

結衣 ニコニコスマイルはそう言う、また空に浮きあがって行った。

天使 『上の世界も悪い世界ではないですよ！』

結衣 ニコニコスマイルは羽根をはたかせて飛んで行った。…上の世界は悪い世界じゃない。…そうは言われたものの、現実が受け止められない。現実なのかもよくわからない。私は死んだ。死んだ。…その言葉がぐるぐると頭を駆けめぐり、突然の出来事に、どうしていいのかわからず、途方に暮れていた。